

古墳の埋葬施設の階層性と地域間関係

—古墳時代中期の九州北部を例として—

佐賀大学 重藤輝行

要旨

古墳時代の北部九州では、古墳に多様な埋葬施設が採用されており、その多様性は時間的な変化とともに、階層差および地域間の関係と対応している。古墳時代中期を中心に、首長墓レベル、中小規模の古墳から構成される古墳群レベルの埋葬施設を分析することにより、各階層の古墳が様々な地域と多元的な関係を結ぶ複雑な動向を知ることができる。

首長のような上位の階層ほど遠隔地との関係を形成し、その範囲は朝鮮半島にまで及んでいる。一方、中小規模の古墳でも地域内の首長層や隣接する地域との関係によって新たな埋葬施設、さらには葬送儀礼を取り入れる。ただ、このような関係は固定的なものではなく、世代ごと、あるいは人間関係の形成ごとに変更されるような不安定な側面も見られる。これらから古墳時代地域社会の階層的、多元的な社会構成を想定でき、ウヂなどの社会組織の様相とも対応すると考えられる。

キーワード：古墳埋葬施設、階層性、地域間関係、社会構成

I はじめに

古墳時代は弥生時代から連続性をもちながらも、飛躍的に社会の複雑化、階層化が進んだ時代である。それと連動し、地域間の交通、広域的な物資の流通、人の移動も活性化したと考えられ、それは朝鮮半島、中国にまで及んだ。時期による変動、強弱もあるが、地域間関係、交流、対外交渉が大きく進展した時代である。これを物語る資料は集落、古墳、生産遺跡など様々な遺跡に存在し、地域内の階層差も多段階で、動的なものとなる。これらの要素は古墳時代の歴史像の重要な部分となっている。

九州北部の古墳時代は他地域の古墳の埋葬施設を導入するとともに、他地域へと各種の埋葬施設を発信する活発な地域間関係を見せる。また、同時期、同一地域において複数種の埋葬施設が存在し、それが副葬品の質量、墳丘規模の階層差と対応する。九州北部の古墳埋葬施設は地域間関係、階層差の双方が顕著にあらわれた資料と言える。そのような地域間関係、階層差は古墳埋葬施設がもつ葬送儀礼の中での象徴的意義と、古墳を築造を担った人々の移動や活動、

その背後にある社会構成の所産と考えられる。

本稿では九州北部の古墳時代中期を中心とした埋葬施設を地域間関係、階層性を二つの軸として検討を行う。そして、地域間関係、階層性を結びつける人々の動きや当時の社会構成の一端について論ずることにしたい。

II 古墳時代の階層性と地域間関係に関する研究と本稿の課題

古墳時代の地域間関係については三角縁神獣鏡同範鏡などの副葬品の配布、流通からの研究が先導してきた(小林1961他)。例えば鏡、甲冑類、装飾大刀、馬具など物資の流通に関しては、対外交渉の観点も交え、膨大な研究の蓄積がある。地域間関係のみならず、中国、朝鮮半島から舶載された器物については、日本列島にとどまらない東アジアを領域とした議論も可能である。しかし、副葬品などの物資については製作地、三角縁神獣鏡同範鏡論のような配布および流通主体の問題、地域での再分配の有無、伝世の有無、伝世したとすればその場所などの様々な変数への配慮が必要となるので、問題は複雑である。

副葬品の中で威勢品、威信財は古墳時代の中心地域である畿内の有力古墳や地域の首長墓等の上位階層の古墳から出土することが多い。それにより、政権と地域の有力者との間の政治、権力的関係、地域における有力者層の抽出が可能となるが、その反面、中小規模の古墳からの出土例は限定される。上位階層を析出する目的には威信財的な副葬品は有効であるが、奥行きのある階層的關係を検討する場合には、対象から除外される古墳も多いため不都合が生じる。

一方、墳丘形態に関しては、前方後円墳の汎列島の普及の背景にカバネ秩序(西嶋1961)や擬制的同祖同族関係(近藤1983他)の想定を介在させ、広域に及ぶ政治性が評価されてきた。より具体的には前方後円墳の詳細な築造企画の有無とその共有や、埴輪の広がりなどからも地域間関係が議論されている。埴輪は地域間での形態の共有、技術的交流にとどまらず、大量に生産されるために工人編成における地域間関係の議論が可能な研究段階に至っている。しかし、威信財と同様に、前方後円墳や埴輪からのアプローチも大型古墳に限られるという難点がある。

副葬品に比べ、埋葬施設の構築は、寿陵の問題はあるが被葬者の死と大きな時間差を想定しなくても良い。石棺や横穴式石室の型式設定などのように埋葬施設自体の細かい変化、埋葬施設そのものの編年的な位置づけが解明できる場合もある。また、例えば石棺の輸送など地域と地域との1対1の関係、横穴式石室の技術の系譜のように地域間関係が具体的に議論できる(初期の研究として樋口1955、白石1965他)。どのような階層の古墳であれ埋葬施設を伴うので、墳丘規模、副葬品等を参照することによって、埋葬施設間の階層的關係、その変化の議論が容易な資料である。さらに、埋葬施設は死者の葬送という墓としての古墳の核心的な部分を代表する構成要素とも言える。このような埋葬施設の特性をもとに、石棺の移動等から政治過程、地域的な政治体の構造が議論されてきた(間壁・間壁1975、和田1998他)。また、九州では舟形石棺など地域的な刳抜式石棺の盛行が顕著で、有明海沿岸地域の首長間関係などの地域的な結集と地域間交流が議論されている。

古墳の階層性については、古墳時代後期に増加する群集墳が目ざされてきたが、近藤義郎氏は後期群集墳に限定せず、古式群集墳や、中小規模の古墳から古墳時代を通じた階層差の存在を明確にした(近藤1983)。また、都出比呂志氏(都出1989・2005他)は弥生時代、古墳時代の展開を階層性を基礎に捉え、古墳時代においては前方後円墳の列島主要部への広がりとともに、古墳の墳丘規模・墳丘形態からなる階層構成を基礎とした前方後円墳体制の時代、社会として描いた。これらを受けて、菊地芳朗氏は中小規模の古墳からなる古墳群が古墳時代当初から存在し、その動向を地域の社会と倭政権との関係の双方から分析すべきことを示した(菊地2005)。また、林正憲氏は、相互承認関係に基づく前方後円墳体制が重層的な階層構造を生み出し、次第に階層構造が固定化されていく、といった動態的なモデルを提示している(林2010)。特に埋葬施設は、諸階層の古墳を総合的に対象としつつ、地域を限っての時間的変化を追うことができ(吉留1990, 重藤2007, 宇野2011他)、動態的な検討に有効な資料となる。

以上のように、古墳時代研究では論ずる課題に応じて、古墳の構成要素別の性質を考慮して、検討する必要があるが、本稿では地域間関係と階層性を古墳を読み解く二つの軸に据え、埋葬施設を資料として取り上げることとする。九州北部を中心に、首長墓に見られる地域間関係を検討を行い、あわせて中小規模の古墳からなる古墳群を事例に階層性とその変化を見て、地域間関係、階層性を形成した当時の社会構成を議論することにしたい。

Ⅲ 九州北部における埋葬施設の分類と編年

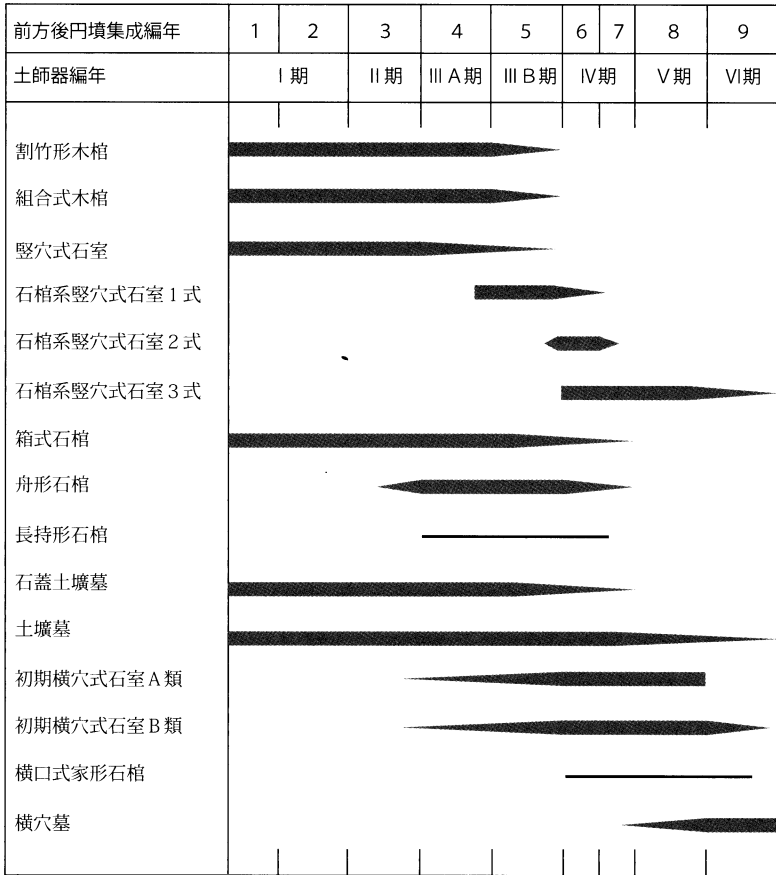
筆者は、九州北部の古墳時代前期～中期の埋葬施設の種類、時期、階層性について検討したことがある(重藤2007・2011, 重藤・西1995)。ここで前方後円墳集成編年(近藤編1992)を基準に、当該期の埋葬施設の種類と、それぞれの時期を整理しておく(第1図)。

一方、中小規模の古墳では、副葬品、埴輪による時期決定ができないため、土器、特に須恵器の出土量が少ない前方後円墳編年7期以前は、土師器による時期決定が重要となる。本稿では別稿での土師器編年(重藤2010)による¹⁾。なお、各種埋葬施設の事例、時期決定の詳細については、前稿(重藤2007・2011, 重藤・西1995)を参照していただきたい。

割竹形木棺 割竹形木棺を直葬するものの他に、粘土槨もあるが九州北部では少ない。1～2期には首長墓級の大型古墳では堅穴式石室に納められるものもあるが、前方後円墳編年4期以降、中小規模の古墳に限定されるようになり、6期以降には消滅する。なお、横断面形が円形でないもの、小口部にむけて底面が若干あがるものを舟形木棺と呼ぶ場合もある。

組合式木棺 箱形の木棺で、その消長は割竹形木棺とほぼ同様である。規模による細分も可能であり、4～5期の長大で礫敷の例は日本海沿岸との関連が指摘されるが、ここでは区分しない。

堅穴式石室 割竹形木棺、組合式木棺、舟形石棺等を内部に納めるもので、厳密には堅穴式石槨とすべきとも指摘されている。九州北部では古墳時代前期に多く、古墳時代中期初頭、4期には減少する。なお、福岡県うきは市月岡古墳のように長持形石棺を納める例もある。



第1図 九州北部における各種埋葬施設の消長

石棺系竪穴式石室

木棺を使用せず、箱式石棺と同様に直葬する竪穴式石室で、4期以降に多い²⁾。1～3式に分類可能で、1式は基底部から割石を小口積みするものである。2式は短壁の基底部に板石をたてるが長壁は基底部から割石を小口積みするものである。前者が先行するが、いずれも6期以前にほぼ限定される。これに対して3式は4壁の基底部に腰石状に板石を立てるもので、7～8期に盛行し、一部の地域

域では9期以降も古墳周辺の埋葬として残存する。

箱式石棺 弥生時代以来、継続する埋葬施設であるが、古墳時代の九州北部では5期前後までは一般的で、7期頃にはほぼ消滅する。石棺系竪穴式石室3式に転換したと考えられる。

舟形石棺 3期後半に出現し、4～5期を中心に盛行する。阿蘇溶結凝灰岩を利用したものが主であるが、唐津湾周辺では松浦砂岩を用いたものもある。

長持形石棺 九州では例が少ないが、4期の佐賀県唐津市谷口古墳、6期の福岡県月岡古墳にその典型的な例を見ることができる。

石蓋土壙墓 箱式石棺同様、弥生時代以来の埋葬施設であるが、5期までは比較的、一般的な埋葬施設であり、その後、減少に転ずる。

土壙墓 石蓋土壙墓と区別が難しいが、木蓋のものをこれにあてる。9期以降も少数、残存する。

土器棺 小児用に用いられる土器棺。主に前方後円墳編年5期までに多い。それ以降に残存するものもあるが、それらは渡来人的墓制である可能性も高いとされる(中西2014, 215)。

北部九州型初期横穴式石室A類 長方形の玄室で基本的に羨道を設置せず、奥壁幅1.6m以上

の大型の初期横穴式石室である。4期に出現し、6期以降、九州北部の各地に普及する。肥後には玄室平面が方形で石障を床面に設置する肥後型初期横穴式石室、肥前～筑後の有明海沿岸地域には北部九州型と肥後型の特徴をあわせ持つ筑肥型初期横穴式石室が存在する。なお、北部九州型初期横穴式石室は9期以降に玄室高を増し、単室無羨道横穴式石室へと変化する。

初期横穴式石室B類 奥壁幅1.4m以下の小形で狭長な玄室の初期横穴式石室である。初期横穴式石室A類と同様に4期には出現し、6期以降に普及が進む。9期以降も筑前北部など一部の地域には小形の古墳の埋葬施設として残存する。

横口式家形石棺 舟形石棺と同様に阿蘇溶結凝灰岩を使用し、板材で側石を構成し、小口に横口を設け、天井に家形の石を架構するもの。

横穴墓 九州北部では7期に出現し、8期までは事例が少ないが、9期以降に急増する。

IV 首長墓級古墳の埋葬施設の地域間関係

(1) 古墳時代中期の首長墓級古墳の埋葬施設にみる地域間関係

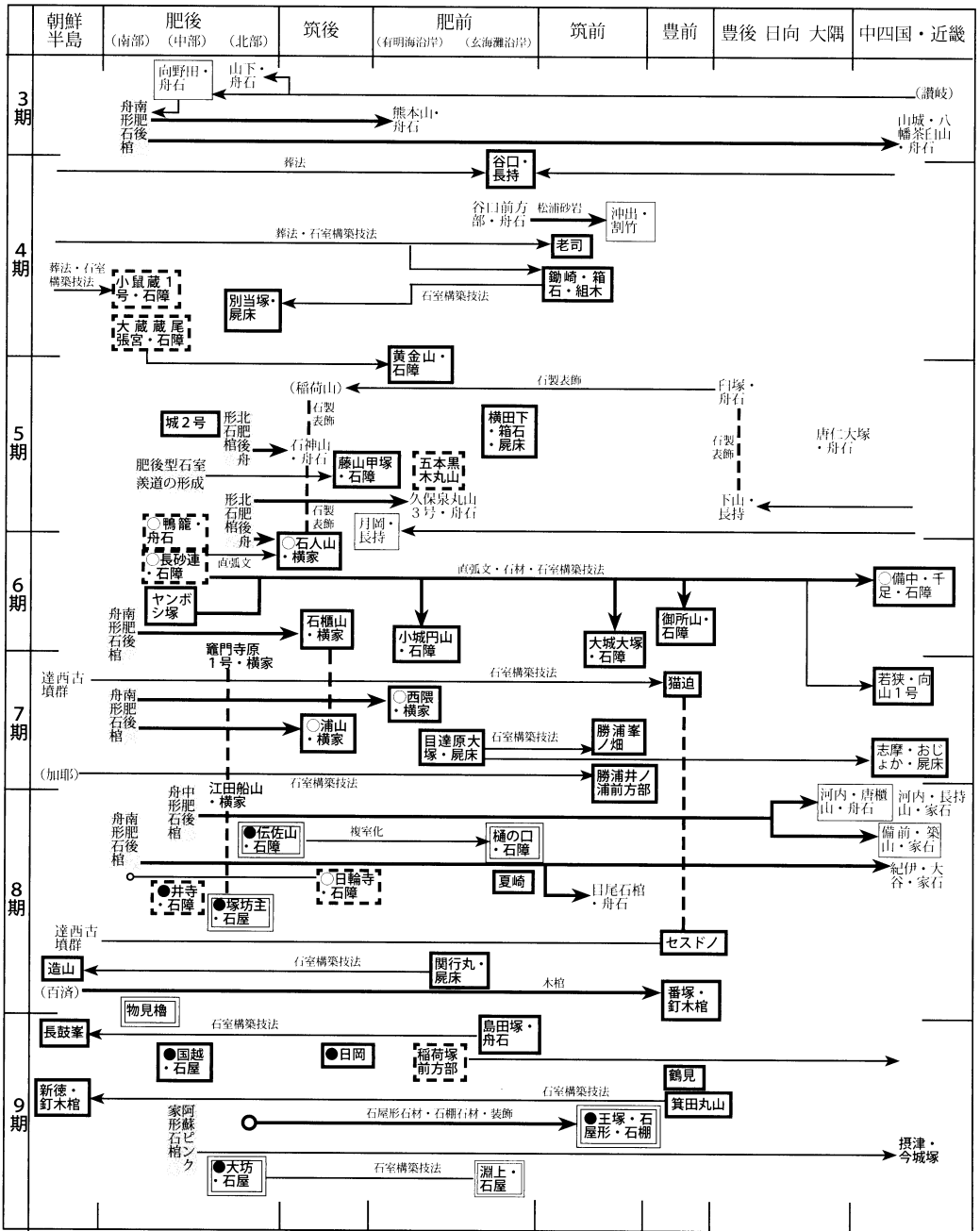
首長墓の埋葬施設は事例が少ない長持形石棺、横口式家形石棺等が含まれる一方で、地域を大きく越えて関係が結ばれるなどの複雑な動態をたどる。それらについては舟形石棺（高木2011、林田1995、若杉1997、石橋2013他）、柳沢一男氏の横口式家形石棺及び筑肥型初期横穴式石室の検討（柳沢1987、柳沢1993）、高木恭二氏らの肥後型初期横穴式石室（高木1994、高木1999、古城2010）の研究により、地域間関係と編年的位置づけの検討が進んでいる。また、近年では、朝鮮半島南海岸部の九州系横穴式石室の研究（洪潜植2009、柳沢2013他）も、九州北部の埋葬施設をめぐる地域間交流の広域性、複雑性の解明につながっている。

そのような研究成果に、各地で解明が進む首長墓編年を考慮して、中期を挟む、古墳時代前期末～後期初頭、前方後円墳集成編年では3～9期前半の石棺の輸送、各地における舟形石棺等地域的な石棺型式の成立、横穴式石室の出現と普及等の地域間関係を示したのが、第2図である。また、埋葬施設の動向と関連の深い装飾古墳、阿蘇溶結凝灰岩製の石製表飾も含めた。

古墳時代前期末、3期には讃岐の技術を導入し、肥後を中心に舟形石棺の製作が開始される。また、石棺製作開始直後から、肥後南部から山城の八幡茶白山古墳や肥前の熊本山古墳に石棺が輸送される。九州と他地域との埋葬施設の地域間関係の活性化を示す画期的現象である。

4期には玄界灘沿岸地域で、谷口古墳、老司古墳、鋤崎古墳で横穴式石室が出現する。これら3例の石室は形態にかなりの差があるが、近接する地域にあることから、相互に交渉するとともに競って新たな埋葬施設を構築した状況が想定される。4期には肥後型横穴式石室も出現し、別当塚古墳、大鼠蔵尾張宮古墳等が当該期と考えられる。5期は首長墓級古墳の調査例が少なく、埋葬施設の地域間交流は顕著ではないが、北肥後の石棺が筑後南部の石神山古墳や肥前の久保泉丸山古墳に輸送される。筑後南部～肥後は舟形石棺の集中地域であるが、その時期は5期を中心に4～7期と想定され³⁾、筑肥型初期横穴式石室の成立も5期に求められる。

6～7期には初期横穴式石室が初めて筑前東部、豊前等に広がり、大きな画期となる。御所



; 竪穴式石室
 ; 玄室長方形横穴式石室
 ; 玄室方形横穴式石室
 ; 複室横穴式石室

古墳名太字は横穴式埋葬施設、細字は竪穴式埋葬施設
 ○ ; 線刻・浮彫裝飾古墳
 ● ; 彩色裝飾古墳
 割竹 ; 割竹形石棺
 箱石 ; 箱式石棺
 組木 ; 組合式木棺
 舟石 ; 舟形石棺
 長持 ; 長持形石棺
 横家 ; 横口式家形石棺
 家石 ; 家形石棺
 石屋 ; 石屋形

第2図 九州北部の首長墓級古墳の埋葬施設に見られる地域間関係 (重藤2015を改変)

山古墳は石障を石室下部に立てるので、筑肥型と言える。一方、加耶の竪穴系横口式石室の影響が見られる勝浦井ノ浦古墳前方部石室や猫迫古墳もある。また、勝浦峯ノ畑古墳の石室については、片袖傾向で腰石の構築技法において、目達原大塚古墳との関係が指摘されている（森下1987, 22）。このような点から、各地での横穴式石室の導入においては他地域からの技術の移入が必要であったと考えられる。この時期には、備中千足古墳、若狭向山1号墳、志摩おじよか古墳など、初期横穴式石室が九州外にも拡散するが、柳沢一男氏はそのような九州以外の地域への九州系の初期横穴式石室のひろがりの実態として技術者の派遣等の往来を想定している（柳沢1982, 1103）。九州内での横穴式石室を巡る地域間関係においても同様の状況が考えられる。一方、有明海沿岸地域における横口式家形石棺の共有、石製表飾の導入と拡散も6期の石人山古墳の出現が転換点に位置づけられる。

8期には中肥後製、馬門石製石棺の輸送が本格化し、その傾向は後期へとつながる。ただし、横口式家形石棺を除けば、この時期には九州北部の古墳での石棺の使用自体は減少したと想定される。したがって、この時期以降の瀬戸内以西への輸送は、輸送先、すなわち発注者側の要望に基づく可能性が高く、それ以前の段階とは質的に差があるのではないかと考えられる⁴⁾。また、九州系の横穴式石室が朝鮮半島西南部に導入されるのも8～9期である。

(2) 埋葬施設にみられる古墳時代の首長間関係

上述のように、古墳時代中期を通じて、九州北部は石棺の輸送、横穴式石室構築技術の移転等の遠隔地との交流がある。特に肥後の石棺が中四国、近畿に輸送されたり、肥前から肥前にかけて展開した筑肥型初期横穴式石室が豊前やさらには備中等東方に伝わり、遠距離にある首長間の交流を物語る。輸送方法、交通手段、ルートの問題も関わるが、遠距離の移動が活発な時代であったと言える。朝鮮半島からの渡来人の移動や、須恵器、各種の副葬品など様々な物資の遠隔地間の輸送もこれに関連すると考えられる。また、九州北部は多様な埋葬施設が存在するため、当該期の地域間関係が特に顕著に見られるが、他地域でも同様の関係が成立していたと想定すべきであろう。

一方、比較的、近接する地域の間での関係も存在する。3期の肥前熊本山古墳、5期の肥前久保泉丸山 ST003への舟形石棺の輸送や、6～7期の横口式家形石棺の筑後への輸送がその例である。横口式家形石棺、石製表飾を指標とするような有明海沿岸地域の首長間同盟（吉田1975, 47-8, 柳沢2014, 63-4）も、近接する地域間の密接なネットワークを基盤としたものと考えられる。筑肥型初期横穴式石室もその基盤の上に成立したと言えよう。

このように首長間の交流関係は遠距離の事例が目立つが、遠距離から近距離にいたるまで重層的なものであったと理解できる。上位階層ほど広域な関係を結ぶ可能性が高いが、比較的親密な近接する地域間では頻度の高い埋葬施設の関係が推測でき、古墳群等の集団との関係が問題となる。また、6～7期の横穴式石室の拡散においては、技術者の派遣が想定されている。当然ながら、石棺の輸送においても、製作地の集団が輸送の任務を担ったと考えられる一方

で、石室構築技術の修得の機会を得るための逆方向の動きも想定できる。首長層自体の移動に加えて、首長あるいは共同体の意志によるそのような技術者、集団成員の移動が、地域間交流、ネットワークの実態の一部を構成していたと理解すべきであろう。

したがって、このような重層的な交流関係、人、集団の関わりは地域首長等に限定されないと考えられる。その解明のためには、首長墓級の大型古墳に加え、中小規模の古墳の検討も必要となる。

V 九州北部の古墳群にみる埋葬施設の階層的関係

(1) 検討の視点

古墳時代中期の九州北部では同一地域、同一時期に複数の種類の埋葬施設があり、それは同一古墳群でも同様である。古墳群においては埋葬施設の差は単純な時期差、地域差、集団差とはいえず、階層差と関連する部分が大きいと予想される。ここではその実態を捉えるために、複数の埋葬施設が見られ、時間的変化をたどることのできる古墳時代中期の古墳群の事例を検討してみる。また、古墳群中でも墳丘規模から、群の展開の中で各時期の盟主的な階層にある盟主墳とそれに従属するかのような小古墳、あるいは墳丘をもたない箱式石棺、土壙墓等の埋葬施設との階層差が見られ、副葬品等もこれに対応することが多い。そこで、墳丘規模等から古墳群内でも各時期の盟主的な古墳を抽出し、その他の古墳との埋葬施設の差を検討する。なお、事例とした古墳群を構成する中小規模の古墳は副葬品、埴輪が少ないため、土師器・須恵器を時期決定の基準とした。

(2) 事例の検討

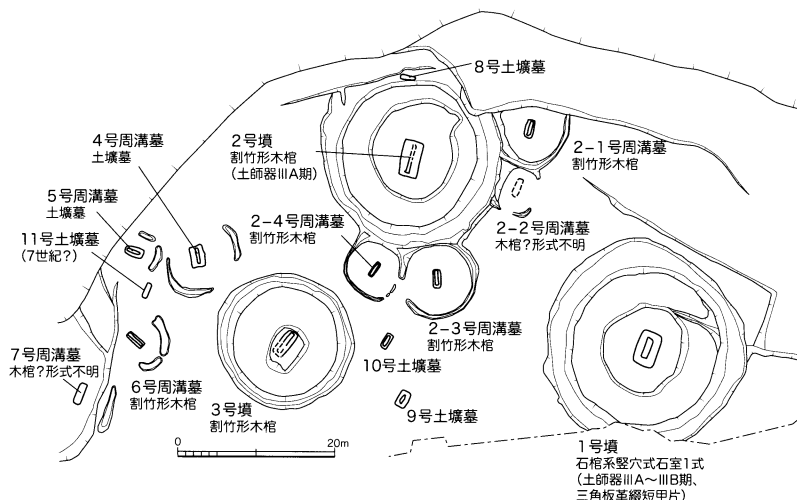
第1表 福岡県春日市原古墳群における埋葬施設の変遷と階層差

III A期		III B期
3号墳 (割竹形木棺)	→ 2号墳 (割竹形木棺)	→ 1号墳 (石棺系竪穴式石室1式)
4号周溝墓 (土壙墓)	2-1号周溝墓 (割竹形木棺)	
6号周溝墓 (割竹形木棺)	2-2号周溝墓 (割竹形木棺)	
5号周溝墓 (土壙墓)	2-3号周溝墓 (割竹形木棺)	
7号周溝墓 (木棺?)	2-4号周溝墓 (割竹形木棺)	
	8号土壙墓	
	9号土壙墓	
	10号土壙墓	

福岡県春日市原古墳群(第3図, 第1表) 福岡平野を流れる那珂川の右岸、丘陵上に立地する(井上他編1976)。古墳群は盟主的な立場を占めるやや大形の円墳1~3号墳と、2・3号墳の周辺の周溝墓とされる小形の古墳、周溝の確認されない土壙墓からなり、2・3号墳とその周辺の古墳との間には明確な階層差が看取できる。

土器により時期決定が可能なのは、土師器III A期の2号墳と土師器III A期~III B期の1号墳に限られ少ないが、割竹形木棺を埋葬施設とする2

号墳につづいて石棺系竪穴式石室1式の1号墳が築造されたと考えられる。土器は伴わないが割竹形木棺の3号墳は2号墳に先行する可能性が高い。したがって、盟主墳では割竹形木棺から石棺系竪穴式石室1式に埋葬施設が変化したことになる。一方、9・10号土壙墓は時期が不明であるが、墓壙主軸方向から1号墳あるいは2号墳に伴う可能性が想定される。この墓群



第3図 福岡県春日市原古墳群 (1/800)

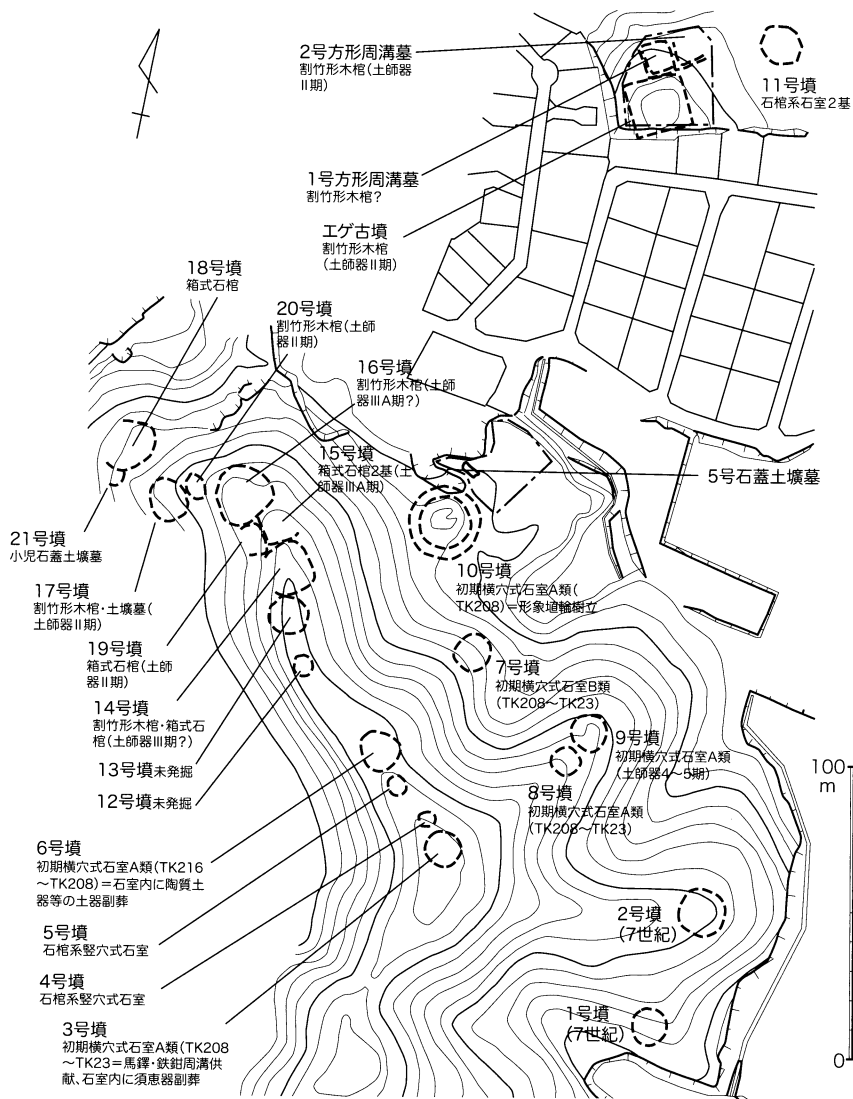
第2表 福岡県那珂川町カクチガ浦古墳群における埋葬施設の変遷と階層差

Ⅱ期		ⅢA期		ⅢB期		Ⅳ期		Ⅴ期		
				〔須恵器編年〕 TK73		TK216		TK208		
								TK23		
18号墳 (箱式石棺)	→	17号墳 (割竹形木棺)	→	16号墳 (割竹形木棺)	→	14号墳 (割竹形木棺)	→	6号墳 (初期横穴式石室A類)	→	3号墳 (初期横穴式石室A類)
└ 21号墳 (石蓋土壇墓)		└ 20号墳 (割竹形木棺)		└ 15号墳 (箱式石棺)		└ 13号墳		└ 5号墳 (石棺系石室3式)		└ 4号墳 (石棺系石室3式)
		└ 19号墳 (箱式石棺)		└ 12号墳						
エゲ古墳 (割竹形木棺)										
└ 1号方形周溝墓 (割竹形木棺?)										
└ 2号方形周溝墓 (割竹形木棺)										
						10号墳 (初期横穴式石室A類)		→		9号墳 (初期横穴式石室A類)
						└ 7号墳 (初期横穴式石室B類)				└ 8号墳 (初期横穴式石室A類)
						└ 5号石蓋土壇墓				

の中では、階層的に低い埋葬施設として土壇墓が用いられたことを示唆する。また、2号墳と3号墳の前後関係が確実とすれば、その間の土師器ⅢA期頃に、小規模な古墳にまで割竹形木棺が普及したと想定できる。

福岡県那珂川町カクチガ浦古墳群（第4図、第2表）福岡平野の南部、那珂川の右岸の丘陵上に立地し、数次の調査により古墳群のほぼ全体が調査されている（宮原編1990、宮原1992、茂2005、茂他2008）。古墳は丘陵の主尾根線上に分布する古墳群と、丘陵北裾のエゲ古墳周辺の古墳群、丘陵東部の尾根線上の古墳群に分かれる。

丘陵尾根線上の古墳群では、尾根北西裾の14～21号墳の群が土師器Ⅱ期～ⅢB期を主体とする。この中では、墳丘規模から14・16～18号墳が盟主墳と想定され、それぞれに小規模な古墳が付随する。盟主墳の埋葬施設では、最も先行する可能性の高い18号墳が箱式石棺であることを除けば、他は割竹形木棺である。一方、盟主墳周辺の小古墳では、20号墳が割竹形木棺を埋葬施設とするが、15・19号墳は箱式石棺、21号墳は小児用の石蓋土壇墓である。した



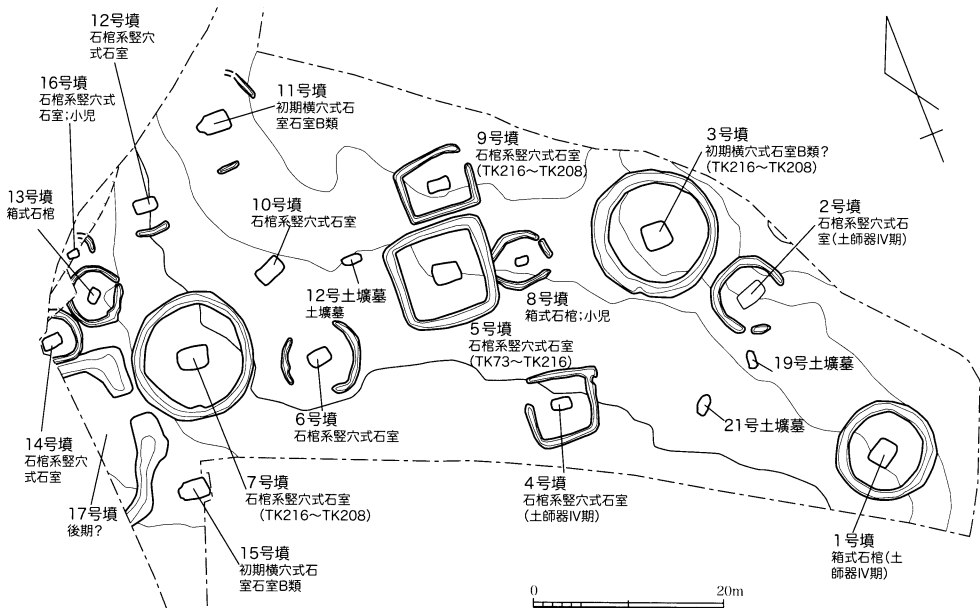
第4図 福岡県那珂川町カクチガ浦古墳群 (1/2500)

がって、土師器Ⅱ期～ⅢB期，前期～中期前半には割竹形木棺を上位とし，箱式石棺，石蓋土壙墓はそれよりも下の階層と位置づけられる。丘陵裾に立地するエゲ古墳とその周辺の古墳群でも，土師器Ⅱ期の盟主墳である割竹形木棺のエゲ古墳を中心に古墳が分布する。

中期後半になると，主尾根線の頂部付近とそこから東に派生する尾根線に古墳群が移動し，3～10号墳が築かれる。丘陵主尾根線上の古墳群では3・6号墳が，丘陵東部の古墳群では9・10号墳が盟主墳であり，その埋葬施設はいずれも北部九州型初期横穴式石室A類である。一方，3・6号墳に伴うと考えられる4・5号墳はいずれも石棺系竪穴式石室3式を埋葬施設にもつ。10号墳に伴う7号墳は初期横穴式石室B類である。また，10号墳の北には墳丘が確認できない5号石蓋土壙墓が存在する。したがって，中期後半には初期横穴式石室A類，初期

第3表 福岡県朝倉市原の東古墳群における埋葬施設の変遷と階層差

〔須恵器編年〕			
TK73	TK216	TK208	TK23
1号墳 (箱式石棺)	5号墳 (石棺系石室)	7号墳 (石棺系石室)	3号墳 (初期横穴式石室B類?)
8号墳 (箱式石棺)	9号墳 (石棺系石室)	6号墳 (石棺系石室)	2号墳 (石棺系石室)
	4号墳 (石棺系石室)	12号墳 (石棺系石室)	11号墳 (初期横穴式石室B類)
	12号土壇墓	14号墳 (石棺系石室)	19号土壇墓
		13号墳 (箱式石棺)	21号土壇墓
		16号墳 (小児石棺系石室)	15号墳 (初期横穴式石室B類)



第5図 福岡県朝倉市原の東古墳群 (1/800)

横穴式石室B類、石棺系竪穴式石室3式、石蓋土壇墓の順の階層差が復元できる。9号墳に伴うと考えられる8号墳は初期横穴式石室A類を採用しているが、中期後半の短期間に、盟主的な古墳における初期横穴式石室A類の採用を契機として、小規模な古墳にまで初期横穴式石室B類、それについて大型の初期横穴式石室A類が普及したことが分かる。

福岡県朝倉市原の東古墳群(第5図, 第3表) 筑後川右岸の段丘上に立地し、九州横断自動車道の建設に伴い調査された(佐々木編1999)。墳丘規模から群中の盟主墳として考えられるのが円墳の1・3・7号墳と方墳の5号墳で、出土土器は石棺系竪穴式石室を埋葬施設とする5号墳が古い。しかし、IV期の土師器の出土にとどまるため微細な時期決定は不可能であるものの、箱式石棺を持つ1号墳は5号墳に先行すると考えられる。したがって、盟主的な古墳では短期間に箱式石棺、石棺系竪穴式石室、初期横穴式石室B類の順に変化したと考えられる⁵⁾。

5号墳には12号土壙墓，7号墳には箱式石棺の13号墳が伴い，石棺系竪穴式石室に対して箱式石棺，土壙墓が階層的に下位の埋葬施設となる。土壙墓は初期横穴式石室B類が出現する3号墳の時期においても，最下層の埋葬施設として存続している可能性がある。また，3号墳の築造を契機に，古墳群では横穴式石室が築造されるようになったが，同時期の階層の低い2号墳には石棺系竪穴式石室が残存し，広く普及するのはその次の段階と考えられる。

福岡県八女市立山山古墳群（第6図，第4表） 岩戸山古墳等の首長墓群である八女古墳群が立地する矢部川北岸の八女丘陵上の古墳時代中期の古墳群である（佐田他1983）。

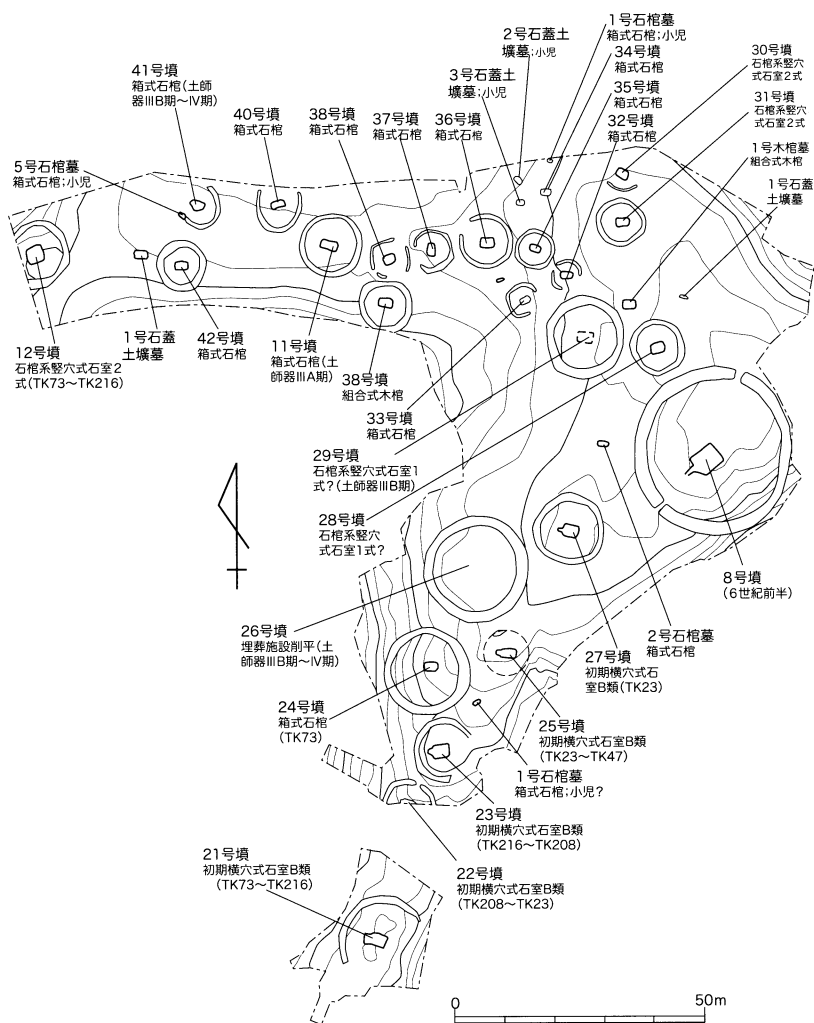
6世紀前半の8号墳付近を境に古墳群は2つの尾根線上に分布する南北の2群に分かれる。南群では，墳丘の規模から21号墳，24号墳，26号墳，27号墳が盟主墳と判断できる。盟主墳ではTK73型式前後と考えられる24号墳が箱式石棺をもつが，TK216型式頃の21号墳で初期横穴式石室B類が導入される。また，25号墳に見るように，遅くともTK47型式頃には小形の円墳にまで初期横穴式石室B類が普及したと理解される。

北群は小規模な古墳が多く，墳丘規模での階層差を設定することが難しいが，やや規模の大きい土師器ⅢA期の11号墳，土師器ⅢB期の29号墳が盟主墳と想定できる。そうであるならば，北群の盟主墳では埋葬施設が箱式石棺から石棺系竪穴式石室1式に変遷したことになる。29号墳に付随する階層的に下位の古墳としては石棺系竪穴式石室1式の28号墳，箱式石棺の32・33号墳，1号木棺墓，1号石蓋土壙墓が挙げられる。一方，11号墳と29号墳との間には箱式石棺を埋葬施設とする小円墳，周溝の無い箱式石棺・土壙墓・石蓋土壙墓が分布する。出土遺物は少ないが，これらは11号墳と29号墳に前後する土師器ⅢA～ⅢB期を中心とするものと推測される。上述した原古墳群，カクチガ浦古墳群の土師器ⅢA～ⅢB期とほぼ同様の階層差が推測できる。また，29号墳の北の31・32号墳，北郡の西端のTK73～TK216型式の12号墳があり，いずれも石棺系竪穴式石室2式である。石棺系竪穴式石室1式に後続するものであり，29号墳を契機に石棺系竪穴式石室が採用され，周辺の小古墳にも拡散したと考えられる。

第4表 福岡県八女市立山山古墳群における埋葬施設の変遷と階層差

ⅢA期	ⅢB期 〔須恵器編年〕TK73	IV期 TK216	TK208	V期〔土師器編年〕 TK23	TK47
	26号墳 (不明)	24号墳 (箱式石棺)	21号墳 (初期横穴式石室B類)	27号墳 (初期横穴式石室B類)	
		1号石棺 (箱式石棺)	23号墳 (初期横穴式石室B類)	25号墳 (初期横穴式石室B類)	

11号墳 (箱式石棺)	29号墳 (石棺系石室1式)				
38号墳 (組合式木棺)	28号墳 (石棺系石室1式)	30号墳 (石棺系石室2式)	12号墳 (石棺系石室2式)		
(箱式石棺を埋葬施設とする小円墳)	32号墳 (箱式石棺)	31号墳 (石棺系石室2式)			
(周溝のない箱式石棺・土壙墓・石蓋土壙墓)	33号墳 (箱式石棺)	1号墳木棺墓 (組合式木棺)			
		1号石蓋土壙墓			



第6図 福岡県八女市立山山古墳群 (1/800)

一方、12号墳の時期には南群で初期横穴式石室が導入されているので、群を形成した集団ごとに新しい埋葬施設を導入する契機を異にした可能性が高い。

(3) 古墳群中の埋葬施設の変化と階層性

九州北部の古墳時代中期は、古墳群中でも盟主墳とそれに付随する小古墳、さらには墳丘さえ形成しない埋葬という階層性が見られる。また、1古墳群中でも複数種類の埋葬施設が共存し、階層差と対応するが、盟主墳、小古墳という同一階層であっても埋葬施設の種類が時期によって変化する。全国的にも階層差とその変動の顕著な古墳時代中期の特徴と合致しているが、埋葬施設をめぐる古墳群を築造した集団内の社会関係、古墳群の築造集団とそのさらには上位の集団あるいは首長層との関係を示唆するものと考えられる。

例えば、カクチガ浦古墳群、原の東古墳群では盟主墳での横穴式石室の導入を契機として、

群内に横穴式石室が拡散する。立山山古墳群での石棺系竪穴式石室の拡散、原古墳群の割竹形木棺の普及も同様の過程であろう。古墳群中での初期横穴式石室などの新たな埋葬施設は、盟主墳での採用を契機、起点として古墳群内へと普及、拡散したと言える。前述した首長墓における埋葬施設の地域間関係を考慮すると、埋葬施設に関する技術、情報は首長墓を頂点とし、古墳群中の小古墳、墳丘の無い埋葬に至る階層的系列に沿って、広がると推測できる。

ただし、古墳群の様相から見れば、このような階層的系列は世代を超えて固定化するものではない。盟主墳の埋葬施設の変化は世代ごとに首長、上位集団との関係を結んだことによると推測される。九州の前期古墳の竪穴式石室において世代ごとに新たな石室が取り入れられるとする辻田淳一郎氏の指摘（辻田2011, 28）に符合する。また、原古墳群2号墳周辺の周溝墓のあり方も2号墳の被葬者を中心とした世代ごとの階層関係の存在を示唆すると思われる。

なお、九州北部の古墳時代後期では、装飾古墳、複室構造の横穴式石室は階層的に上位の古墳に限られる。古墳時代中期よりは埋葬施設の階層差の固定化が進んだと推測しておきたい。

VI 埋葬施設の階層性・地域間関係と古墳時代社会

(1) 埋葬施設の階層性と地域間関係

古墳時代の九州北部は石棺の地域間輸送、横穴式石室の導入と普及に代表されるように、埋葬施設において活発な地域間関係が見られる。首長間関係を基軸とし、その範囲は海を越えて朝鮮半島にまで及ぶ。また、有明海沿岸域の首長連合のような関係をそこに認めれば、和田晴吾氏の説く石棺を共有する古墳時代中期の地域首長連合のあり方も符合する（和田1998）。

ただし、首長墓級古墳に限らず中小規模の古墳においても埋葬施設の活発な変化があり、階層性も顕著である。広瀬和雄氏は首長層のネットワークの重層性を指摘しているが（広瀬1994, 147）、このような埋葬施設の関係は階層的には地域首長のみならず、古墳群の被葬者レベルにまで及ぶものと言える。空間的にも遠距離から近距離にいたるまで重層的なもので、地域首長、古墳群中の盟主墳被葬者層のような上位階層ほど広域な関係を結ぶ可能性が高いと考えられる。また、埋葬施設の交流の背景には、構築技術者あるいは輸送を担う集団の派遣が推測され、逆に先取的地域への技術や新しい儀礼修得の機会を得るための移動も想定された。これらは、古墳時代中期のみならず、前期、後期においても同様であろう。

太田宏明氏は畿内中枢部で新しく開発された畿内型横穴式石室の構築技術が畿内各地の群集墳中の石室に正確かつ円滑に伝達されたのに対し、九州北部の横穴式石室の構築技術は複数の集団間で情報の発信と受信が繰り返される連鎖型の伝播で、互恵的な人間関係を媒体としたとする（太田2003・2011）。九州北部の場合、個々の古墳構築に際して、首長層のネットワーク、階層的系列をたどりながら、首長本人、古墳群中の盟主墳の被葬者層に加えて、技術者、集団成員が移動することにより、連鎖的に新たな埋葬施設の情報が拡散したと推測される。

ところで、古墳を構成する物質資料には統一性と地域性、辻田淳一郎氏の言葉を借りれば多元性と一元性（辻田2012, 47-48）が存在する。統一性、一元性は先祖祭祀の共通化（近藤

1983), 墳墓要素を政策的に普及させることにより首長層の系列化や差別化を図る政治的意図を反映した中央政権の儀礼管理(福永2005, 279)などから説明されることがある。これに対して、地域性、多元性は地域の政権のある程度の政治的自立性(広瀬2007, 244-5他)から説明されることが多い。また、古墳を構成する要素の中で、中央政権によって一元的な管理が発動可能であったと想定されるのは、威信財流通という点での副葬品の構成と、墳丘構築や外表施設に関わる技術的側面であり、そのため威信財的副葬品、軍事的物資は地域差が少ないが、これに対して埋葬施設は地域差が大きいと辻田氏は指摘する(辻田2012, 47-8)。広瀬和雄氏は埋葬施設は構築と埋葬に直接関わった限られた人々にしか見えないので、中央政権の関与が小さいとする(広瀬2013, 157)。このような考え方に立って、九州北部の埋葬施設の地域性の一端は説明が可能であろう。しかし、地域性の強い埋葬施設において、広域の交流が行われことについては、さらに踏み込んだ解釈が必要となる。そこでは、埋葬施設のもつ古墳葬送儀礼の中での象徴性も含めた意義に加えて、先に見た埋葬施設をめぐる地域間交流の重層性が鍵になると考えられる。

(2) 古墳時代社会の交流の重層性

古墳時代から古代にかけてウヂ(氏)が社会関係として存在するが、北康宏氏はその成立過程を3期に分けて整理する(北2014)。その第I期はトモの段階で、名を付すことで支配を及ぼし、名を負うことで集団に帰属するという直接的な人格関係である。複数の名を負って複数の集団に帰属したり、別基準の名を並列的に負うこともあり、必ずしも王権に集約されない重層性と多属性を有する名に媒介された社会関係とする。また、名を与える側の意味のみならず、与えられる側の選択意志にも依存して、名を変える、すなわち帰属する対象を変更したり、新たな関係に自己を位置づけることもあった。稲荷山古墳鉄剣銘の「仕奉」、「奉事根源」という王民意識も、名を負う側の現実的利害に基づく選択結果とする。第II期は名が設定者の手を離れて実体化し、名を負うことが権益の継承と観念される段階である。永続団体へと転ずるとともに重層的な奉仕関係を自己の中に吸収する段階で、狭義のウヂの成立をそこに求めている。稲荷山鉄剣銘ではワワケと時間を共有した祖父・父以来のワワケの一族が、杖刀人首の地位継承の歴史や同祖のウヂとのネットワークを負っている事実を説明しており、名を権益として特定の親族が負うようになる過渡期をリアルに示すとする。第III期は名の権益否定と律令官人制への移行を期し、公認した氏上を核に擬制的な出自集団が設定される段階である。

以上のような第II期以前のトモ、ウヂは名として現れるとされるが、実態としては奉仕や貢納、逆に言えば物資の再分配や、威信財の配布と連動したと考えられる。一方、観念的にはその名を擬制的に王名に遡及させたり、祖霊を王権神話と結合させる、逆に言えば始祖が王権神話、上位集団の伝承に吸収される状況が想定される。

貢納と奉仕は律令制下では調、庸に相当するが、石上英一氏は(石上1996, 177-8)、調の前身としてのツキには首長の地域的階級支配機関への展開、および共同体間の重層的支配服属関

係の形成により、服属集団の服属儀礼の一環として上位の支配共同体への供給制度の段階があったとする。庸の前身としてのチカラシロには共同体成員による共同体首長への服属の証としての労働奉仕、共同体間の支配服属関係の形成による被支配共同体の支配共同体への服属儀礼における労働奉仕や労働力貢上制度の成立の段階があったとする。このような貢納と奉仕にみる集団間の重層的な関係は、上述したウヂの第Ⅰ・Ⅱ段階と構造的に同質であったと考えられる⁶⁾。

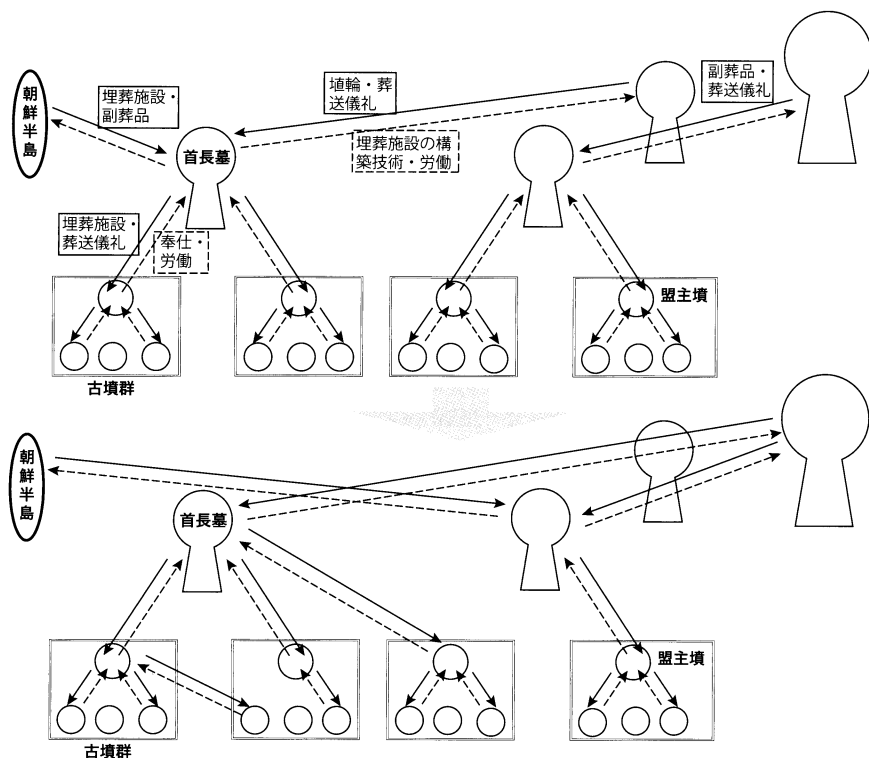
トモ、ウヂから考えられる多属性、重層性は貢納、奉仕の関係として現れるし、それは埋葬施設の階層性、地域間関係とも符合する部分が多い。貢納、奉仕はまさに埋葬施設をめぐる技術者、集団の派遣、石棺等の輸送の原理にほぼ等しいものといえる。それは遠隔地にある首長間だけでなく、地域首長の支配領域、農業共同体、集落など重層的な地域単位内でも起こり得たと考えられる。埋葬施設の地域間関係の背景をこのように想定し、第7図のようにその重層性、多属性と変化をモデル化しておきたい。

(3) 古墳の葬送儀礼と社会集団

古墳は、政治・心性面における象徴物として、前方後円墳のみならず、中小形の円墳・方墳、墳丘を持たない土壙墓等にいたるまで、墳墓体系を構成している(土生田2003, 226)。古墳時代初頭における前方後円墳の成立には先祖祭祀の共通化(近藤1983, 寺沢2000他)が起こり、擬制的同祖同族関係にもとづいて、各地に広がったとされる。階層的であるし、階層間、地域間の交流と密接に結びついた墳墓体系といえることができる。

本稿では埋葬施設の地域間交流、階層的關係に基づいた地域内での初期横穴式石室の普及などの現象の背景に、重層的、多属的な貢納、奉仕等に類するような人の移動、交流を想定した。葬送儀礼に奉仕の一部として技術者や集団を派遣し合う関係、貢納の一部として石棺等を輸送する関係が、古墳に現れた階層的な地域間交流の実態と考えられる。本稿で取り上げた九州の埋葬施設はもちろんであるが、埴輪製作、古墳墳丘築造のための労働力編成もその観点から理解できよう⁷⁾。例えば、首長の葬送儀礼には、技術者、築造の労働のために集まった下位集団の成員、各地の首長さらにはヤマト政権からの使者、共同体を構成する各集団の長などの様々な階層の参加が想定できる。そのような人の動きにより、墳丘や埋葬施設の構築技法、儀礼の内容が導入されたり、埋葬施設の構築技術、情報が拡散したと考えられる。

ところで、北康宏氏はウヂ成立過程の第Ⅰ期から第Ⅱ期に名を付与される側にも選択意志が存在するにもかかわらず、結果的には王権への依存性、求心性が強い国制が成立したとする。その要因として、北氏はウヂの他律制、すなわちウヂがより強力な名を追い求めるような強固な王権依存性に求めている。王権への依存を、首長等の階層的上位者、上位共同体への依存と言い換えれば、埋葬施設に見られる階層性と地域間関係、さらには古墳文化の一元性あるいは儀礼管理はこの求心的な動きの累積として理解できる。埋葬施設の階層間、地域間の交流は、貢納、奉仕の原型となるような重層的、多属的な人の移動の産物であり、その分析から当時の



第7図 古墳時代中期の九州北部における埋葬施設の地域・階層間関係のモデル

交流の具体的な内容、歴史的特徴が解明できると思われる。

田中良之氏は古墳出土人骨の歯冠計測値の近縁性をもとに、古墳時代の親族構造の変化を解明した(田中1995)。ここで論じたような地域間関係、階層性は、親族関係にも規定されたものと考えられる。ここでの検討結果と対照するならば、古墳時代中期に埋葬施設の階層性が顕著になるが、古墳時代中期後半に横穴式石室に統一されていくのは、親族構造の父系への傾斜に伴い、多属性の幅が減少していったことと連動するかもしれない。また、古墳時代中期後半の畿内への石棺輸送は、多属的なネットワークの中から、大王権への地域首長の奉仕、貢納へと確立していく過程ともとれる。このような変質に親族構造の変化が関係していた可能性が高いのではないかと予測される。

VII おわりに

古墳は階層的であるとともに、当時の活発な地域間関係を反映した墓制である。古墳の科学的研究では時間的展開の中で、地域差、階層差を軸として、現象を確実に言語化、数値化、図式化し、それにもとづいて仮説化、解釈を加えることと考えられる。古墳時代中期前後の首長墓級古墳の埋葬施設の地域間関係と、古墳群中での階層差について時間的展開の検討は、現象を図式化する試みの一つである。

一方、古墳は死者の生前の関係性、死者同志の関係性を表示、象徴する装置としての側面の強い墓制である。検討によって、古墳時代の様々な社会経済的交通の活発化と社会の階層化が古墳埋葬施設にも反映されている様相を明らかにすることができ、埋葬施設の象徴性的一端もかいま見ることができた。

さらに、本稿では九州の古墳埋葬施設と地域間関係を階層性を検討し、社会の重層性、多属性に基づいたネットワークに沿った首長層、各級の集団の長、さらには構築技術者、奉仕のための集団成員の移動による埋葬施設構築技術、葬送儀礼の拡散、地域間関係を推測し、解釈の一つとしてモデル化した。このようなモデル化については、古墳埋葬施設とは異なる副葬品等の古墳の構成要素、古墳とは異なる集落遺跡、生産遺跡などの資料から検証、修正、補強する必要があると考えられる。

引用文献では煩雑さをさけるため個々の古墳の報告書等は省略した。また、本稿を作成するにあたり、次の方々に御教示をいただいた。

小松讓氏、辻田淳一郎氏、桃崎祐輔氏、柳澤一男氏、金武重氏

■注

- 1) 須恵器編年との関係は、前方後円墳編年6期=TK73形式、同7期=TK216・TK208形式、同8期=TK23・TK47型式と考えていて、土師器編年とも矛盾しない。また、朝倉系初期須恵器は池の上Ⅰ～Ⅲ式がTK73～TK216型式平行と考えている。
- 2) 筆者の分類と先行研究については、前稿を参照していただきたいが、その後、山中英彦氏も細部については異なるが、ほぼ同様の分類を行っている(山中2013)。なお、山中氏は百合ヶ丘古墳群16号墳を石室幅から石棺系堅穴式石室には属さない堅穴式石室としているが、同例については時期、規模から考えて初期横穴式石室の可能性も考慮すべきではないかと思われる。
- 3) 柳澤一男氏(柳澤1987)は舟形石棺の終焉を5世紀第4四半期に求めている。
- 4) ここでは紀伊大谷古墳石棺を高木恭二氏(高木2011)の見解により南肥後型舟形石棺としているが、同例を豊後で製作された石棺とする意見もある(柳澤1987, 202)。いずれにしても九州において舟形石棺の製作が終息に向かう時期のものであり、輸送用に製作された特殊品の可能性を想定しておきたい。
- 5) 3号墳は報告書では石棺系堅穴式石室と報告されているが、石室幅が広いと、短壁の上部に横口を設置した初期横穴式石室B類の可能性が高いと判断し、第5図および第3表に示している。
- 6) 系譜において自己が双方の親族関係によって、複数の集団に帰属し、それが集団相互の有機的結合を支えたとする義江彰子氏の両属性に関する論も参考すれば(義江1986, 4)、祖霊の仮構的系列化・階層化も流動的、組み換え可能で、多属的なものであったと考えられる。また、部民制に関する鎌田元一氏の解釈も同様のものとして理解できる(鎌田2001)。
- 7) 犬木努氏は宮崎県西都市女狭穂塚、男狭穂塚の築造に際して、畿内中枢からの埴輪工人の派遣を指摘するとともに、在地工人が王権への奉仕を通じて畿内の埴輪の製作に習熟した可能性を論じている(犬木2015)。また、廣瀬覚氏は、各地地域への直接伝播による埴輪生産の拡散では、王権周辺での埴輪生産の経験を有する少数の工人が関与していたが、王権中枢部から派遣された集団かあるいは地域から王権中枢部に赴きそこで技術伝習を受けた集団であるかは区別が困難とし、双方の可能性を想定している(廣瀬

2015)。

■引用文献

- 石上英一1996『律令国家と社会構造』名著刊行会
- 石橋宏2013『古墳時代石棺秩序の復元』六一書房
- 犬木努2015「西都原古墳群の埴輪-「平成調査」から「大正調査」へ-」宮崎県立西都原考古博物館編『西都原古墳群総括報告書 平成24～26年度西都原古墳群基礎調査報告』宮崎県教育委員会, 93-114頁
- 井上裕弘・木下修編1976『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会
- 宇野慎敏2011「九州古墳時代の埋葬施設にみる階層秩序と地域性」『九州島における古墳埋葬施設の多様性』第14回九州前方後円墳研究会資料集 1-72頁
- 太田宏明2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』第15号 35-56頁
- 太田宏明2011「考古資料にみられる分布境界領域の様相-横穴式石室を資料として-」『考古学研究』第57巻第4号 71-89頁
- 鎌田元一2001『律令公民制の研究』塙書房
- 菊地芳朗2005「群小墳の成立・展開とその意義」大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集』都出比呂志先生退任記念 大阪大学考古学友の会 557-582頁
- 北康宏2014「大王とウヂ」『岩波講座日本歴史』第2巻古代2 岩波書店 37-74頁
- 小林行雄1961『古墳時代の研究』青木書店
- 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 近藤義郎編1992『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 佐々木隆彦編1999『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』(53) 福岡県教育委員会
- 佐田茂・伊崎俊秋編1983『立山山古墳群』八女市文化財調査報告書第10集
- 茂和敏2005『カクチガ浦遺跡群』IV 那珂川町文化財調査報告書第64集
- 茂和敏・廣木誠2008『カクチガ浦遺跡群』V 那珂川町文化財調査報告書第71集
- 重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性-東部の前期・中期古墳を例として-」『日本考古学』第2号 95-117
- 重藤輝行2007「埋葬施設-その変化と階層性・地域性-」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会資料集 107-133頁
- 重藤輝行2010「北部九州における古墳時代中期の土器編年」『古文化談叢』第63集 119-160頁
- 重藤輝行2011「肥前東部地域における古墳時代前期・中期の埋葬施設」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター紀要』(5) 1-16頁
- 重藤輝行2015「古墳時代中期の日本列島 九州」『中期古墳とその時代 5世紀の倭王権を考える』季刊考古学別冊22 雄山閣 20-29頁
- 白石太一郎1965「日本における横穴式石室の系譜-横穴式石室の受容に関する一考察」『先史学研究』第5号(『日本考古学論集』6 墳墓と経塚 吉川弘文館 311-350頁所収)
- 高木恭二1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団 110-132頁
- 高木恭二2011「舟形石棺・家形石棺の一樣相-矩形穿孔と環状縄掛突起-」『坪井清足先生卒寿記念論文集 埋文行政と研究のはざままで』下巻 坪井清足先生の卒寿をお祝いする会, 845-855頁
- 高木恭二・渡辺一徳1990「ニ上山ピンク石製石棺への疑問-九州系舟形石棺から畿内系家形石棺への推移-」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会 239-270頁
- 高木正文1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80号 97-150頁
- 田中良之1995『古墳時代親族構造の研究』柏書房

- 辻田淳一郎2011「初期横穴式石室における連接石棺とその意義」『史淵』第148輯 1-36頁
- 辻田淳一郎2012「古墳文化の多元性と一元性」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学』7
内外の交流と時代の潮流 44-56頁
- 都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 都出比呂志2005『前方後円墳と社会』塙書房
- 寺沢薫2000『日本の歴史』第2巻 王権誕生 講談社
- 中西常雄2014「近畿地方土器棺の基礎的研究-5～8世紀-」『古文化談叢』第72集 63-129頁
- 西嶋定生1961「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号 154-207頁
- 土生田純之2003「古墳の定義についての研究略史」『関西大学考古学研究室開設五十周年記念 考古学論叢』
関西大学考古学研究室 211-228頁
- 林田和人1995「東九州の舟形石棺」『宮崎考古』第14号 33-52頁
- 林正憲2010「古墳時代における階層構造-その複雑性と等質性-」『考古学研究』第57巻第3号 22-36頁
- 樋口隆康1955「九州古墳墓の性格」『史林』第38巻第3号 1-23頁
- 広瀬和雄1994「考古学から見た古代の村落」『岩波講座 日本通史』第3巻 古代2 岩波書店
- 広瀬和雄2007『古墳時代政治構造の研究』塙書房
- 広瀬和雄2013「古墳時代の首長」『国立歴史民俗博物館研究報告』第175集 129-162頁
- 廣瀬覚2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 福永伸哉2005『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会
- 古城史雄2010「肥後における初期横穴式石室出現の背景」『先史学・考古学論究』V（甲元眞之先生退任記念）龍田考古会 579-596頁
- 洪潛植2009「韓半島南部地域の九州系横穴式石室」杉井健編『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会2007年度熊本大会分科会I記録集 中国書店 197-217頁
- 間壁忠彦・間壁菫子1975「石棺研究ノート（三）長持形石棺」倉敷考古館研究集報第11号 1-41頁
- 宮原千佳子編1990『カクチガ浦遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第23集
- 宮原千佳子1992『カクチガ浦遺跡群』II 那珂川町文化財調査報告書第29集
- 森下浩行1987「九州型横穴式石室考-畿内型出現前・横穴式石室の様相-」『古代学研究』115号 14-36頁
- 柳沢一男1982「堅穴系横穴式石室再考-初期横穴式石室の系譜-」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻
森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 1051-1109頁
- 柳沢一男1987「石製表飾考」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』下巻 同朋舎 169-222頁
- 柳沢一男1993「横穴式石室の導入と系譜」『季刊考古学』第45号 28-32頁
- 柳沢一男2013「前二子古墳横穴式石室のルーツを探る-九州と韓国の横穴式石室」『古代東国文化シンポジウム 東アジアから見た前二子古墳』群馬県・群馬県歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会 29-36頁
- 柳沢一男2014『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」094 新泉社
- 山中英彦2013「百合ヶ丘古墳群の石棺系堅穴式石室について」『百合ヶ丘古墳群』苅田町文化財調査報告書
第45集 171-184頁
- 義江明子1986『日本古代氏の構造』吉川弘文館
- 吉田晶1975「古代国家の形成」『岩波講座日本歴史』2 古代2 39-87頁
- 吉留秀敏1990「北部九州の前期古墳と埋葬主体」『考古学研究』第36巻第4号 53-69頁
- 若杉竜太1997「九州石棺考」『先史学・考古学論究』II 龍田考古会 71-131頁
- 和田晴吾1998「古墳時代は国家段階か」都出比呂志・田中琢編『古代史の論点』4 権力と国家と戦争
小学館 142-166頁

考古学は科学か 下
田中良之先生追悼論文集

2016年5月12日 発行

編 者 田中良之先生追悼論文集編集委員会
〒819-0395 福岡市西区元岡744番地
九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座
電話 092(802)5665

発 行 所 中国書店
〒812-0035 福岡市博多区中呉服町5番23号
電話 092(271)3767 FAX 092(272)2946

編 集 協 力 図書出版 花乱社

装 丁 design POOL

印刷・製本 有限会社九州コンピュータ印刷

ISBN978-4-903316-51-2